

舞姫 まいひめ

冒頭部分

森鷗外 もりおうがい

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静
かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもあだなり。今宵は
夜ごとにここに集ひ来るカルタ仲間もホテルに宿りて、
船に残れるは余一人のみなれば。五年前のことなりしが、
平生の望み足りて、洋行の官命をこうむり、このセイゴン
の港まで来しころは、目に見るもの、耳に聞くもの、一つ
として新たなならぬはなく、筆にまかせて書き記しつる紀

こうぶん

いくせんげん

の

行文、日ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せ

こんにち

おもえ

られて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へ

おきな

しそう

ほうげん

よのつね

どうしよく

ば、幼き思想、身のほど知らぬ放言、さらぬも尋常の動植

きんせき

ふうぞく

めずら

しる

金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある

ん

みちのほ

にき

人はいかにか見けむ。こたびは途に上りし時、日記ものせ

かい

さつし

むとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて

ものまな

ま

きしやう

やしな

物学びせし間に、一種のニル・アドミラリの氣象をや養

いえ

ん

ゆえ

ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。